

「ほうがいい」のモーダルな意味・機能に関する考察

仁科明子

目次

1. はじめに
2. 考察対象
3. 先行研究
4. 「ほうがいい」のモーダルな意味・機能を実現する諸条件
 4. 1. 時間的限定性のない文
 4. 1. 1. 事態制御が可能な場合
 4. 1. 2. 事態制御が不可能な場合
 4. 2. 時間的限定性のある文
 4. 2. 1. ポテンシャルの場合
 4. 2. 2. 反レアルの場合
 4. 2. 3. レアルの場合
 4. 3. モーダルな意味・機能のまとめ
5. 形式と意味との関連
 5. 1. 「スル」と「シタ」
 5. 2. 「シナイ」と「シナカッタ」
6. おわりに

1. はじめに

本稿は、評価的組立形式である「ほうがいい」がどのような条件のもとでモーダルな意味・機能の広がりを実現しているかを、体系的に記述することが狙いである。

まず、「ほうがいい」に関する先行研究に触れた上で補足すべき点を指摘し、意味・機能の拡張過程を網羅的に記述するための枠組みを提示する。また、語用論的な側面も視野に入れることで「ほうがいい」を大きく3分類し、特徴を明らかにしていきたい。

2. 考察対象

「ほうがいい」に前接する語の品詞は動詞、名詞、形容詞（形容動詞）、指示詞¹である。「ほうがいい」の前接部分の肯定／否定とテンス、「いい」のテンスの組み合わせによって下記a～hの8パターンの活用形が考えられる（表記は動詞が接続する場合の形）。ただし、8パターンの中で実際にはdの形は不自然である。また名詞と形容詞の場合はcのパターンも不自然である。

またこれらに加えて動詞の場合はアスペクトのバリエーションもあり、「シテイル」や、準アスペクト形式の「シテオク」が見られる。

- a. スルほうがいい
- b. シナイほうがいい
- c. シタほうがいい（名詞、形容詞が接続する場合は??）
- (d. ??シナカッタほうがいい)
- e. スルほうがよかった
- f. シナイほうがよかった
- g. シタほうがよかった
- h. シナカッタほうがよかった

なお本研究の用例は、小説、ドラマ・映画スクリプト、および新聞の会話文から採取した。また、終止形のみを考察対象としている。

3. 先行研究

評価のモダリティ形式に関する重要な先行研究として、高梨（2002）の記述が挙げられる。高梨は、「ほうがいい」「といい」「たらしい」「ばいい」といった評価のモダリティ形式の基本的意味を「当該事態に対する何らかの評価」と規定しており、さらにこの基本的意味は個々の使用において二次的意味に分化していくと述べている。その分化を決定するファクターとして、

- I 当該事態の制御可能性（評価の対象となる当該事態が人の意志によってコントロールできるものとして捉えられているかどうか）
- II 実現状態（当該事態が、実現済み／実現しなかった／実現するかどうか不明）
- III 行為者の人称

¹ 指示詞+「ほうがいい」は受け手発話での使用がほとんどであり、今回の考察対象からは外した。「そのほうがいい」の形で〈励まし〉〈賛同〉、「そのほうがよかった」で〈後悔〉〈不満〉〈肯定評価〉の意味・機能を実現する。

の3点が共通していると指摘している。ⅠⅡは互いに独立関係であるが、Ⅲは制御可能な事態の場合のみに関わってくる。これら3つのファクターによって生じる二次的意味は以下のように分化していくとしている。

- i 当該事態が制御可能な場合、〈当為判断〉(「何々するべきだ、するべきでない」といった、人の行為の必要性・許容性についての判断)を表す。
(例：派手な服は年をとってから着るべきで、若いうちは渋めにおさえたほうがいい。)
- ii 〈当為判断〉を表す場合、さらにその事態が未実現で、かつ行為者が聞き手であれば、働きかけとなる。〈勧め〉や〈警告〉。
(例：欠席扱いにされるから、職員室へ行ったほうがいいんじゃない?)
- iii 当該事態が非実現または既実現の場合、その事態が制御可能かどうかに関わらず、〈後悔〉〈不満〉の意味が生じる。
(例：[渋滞に巻き込まれて]電車に乗ったほうがよかったな。)

また個別の形式ごとに異なる意味として、「ほうがいい」で表される当該事態が制御不可能な未実現のことであり、且つ事態の成り行きが2通りに想定されている場合という条件つきで、〈願望〉の解釈も生まれると加えている。(例：後掲の例¹²参照)

高梨は「動詞+ほうがいい」のみを考察対象としているが、「ほうがいい」の前接部分には動詞以外も接続でき、この点が他の形式と異なっている。品詞という縦割りの分類ではなく、品詞の枠を越えた観点を取り入れることで、「ほうがいい」という表現をめぐる意味・機能体系の全体像がより明らかになるであろう。

4. 「ほうがいい」のモーダルな意味・機能を実現する諸条件

ここからは、諸条件により実現される具体的な意味を記述していく。それには、高梨では触れられていなかった時間的限定性、リアリティと事態制御可能性が重要な要素であると考え。本章ではまず時間的限定性の有無の観点から用例全体を2分し、さらにリアリティや事態制御可能性などの諸条件との関連によって、意味・機能が大きく3側面〈価値判断〉〈意志表示〉〈感情表出〉に分かれていくことを見ていきたい。表1に「ほうがいい」のモーダルな意味・機能の全体像を示している。次節以降、順次この表に具体的な意味・機能を書き加えていく。

		時間的限定性あり		時間的限定性なし	
		事態制御可	事態制御不可	事態制御可	事態制御不可
リアリティ	ポテンシャル	〈意志表示〉		〈価値判断〉	
	反リアル	〈感情表出〉			
	リアル				

〈表1〉「ほうがいい」の意味・機能の3側面

4. 1. 時間的限定性のない文

初めに、「ほうがいい」の前接部分の品詞にこだわらず、事態が時間的に限定されているかどうか（一時的か恒常的か）という観点から分類し考察を行う。本節ではまず、時間的に限定されていない文について見ていきたい。

〈時間的限定性のない文〉…時間軸上の特定の時点における事態ではなく、恒常的な事態について述べている文。

4. 1. 1. 事態制御が可能な場合

時間的限定性がない文において、事態制御が可能かどうかの意味・機能にどのように関わっているかを概観していく。ここでは可能な場合をまず考察する。

〈事態制御可能性〉…当該事態の実現が主体の意志によってコントロールできるか否か。

以下の2例を見て頂きたい。

(1) 僕は夏には夏の野菜をたべた方がいいと思っているわけです。 (立原正秋『冬の旅』)

(2) 東京へ安く行きたい人は、バスで行くほうがいい。 (作例)

(1)、(2)の文で表されている事態はいずれも制御可能な行為である（「夏の野菜を食べる」、「バスで行く」）。しかし、当該事態を即座に実行する行為者は必ずしも存在しない。評価主体である話者は特定の個別主体にとっての眼前の利益や適切性を述べているのではなく、一般的、普遍的な価値判断を下しているに過ぎないのである。つまり、〈行動の適切性〉を表している文となっている。

〈行動の適切性〉…制御可能な当該事態を実現することが、主に行為者にとって有益であり、適切な行動であると判断すること。

4. 1. 2. 事態制御が不可能な場合

次に、事態制御ができない場合を考察してみたい。以下の3例に注目して頂きたい。

(3) 「難しいわね。三人の人間がああのマンションへ行った。どの時点で女は殺されたのか……」

「まだ出て来るかもしれませんねえ」と谷口は半ばやけっぱち気味に言った。

「いいじゃないの」純子は呑気に言った。

「選択の幅は広い方がいいわ、何事も！」 (赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(4) 「問題はどれくらいの人数がストライキに動員できるかだね」

「全員よ！ 参加しない者は半殺しの目にあわせる」

「怖いわねえ。ともかく現実的に考えましょうよ。まずやっぱり男の人が必要よ」

「どうしてよ！ 女の力を見くびって——」

「そうじゃないわよ。でも、私たちが声をかけたって、男の人たちはなかなか素直に聞いてく

れないと思うのよ。それにリーダーはやっぱり男性の方がいいわ」 (同上)

(5) 「だって。庖丁はといでないだろ。かつぶしけずりはないだろ。フライパンの油気は切れてるだろ、洗いすぎるから」

「何だか、油虫がつきそうでね、気持悪いのよ」

「あんなに油切りしちゃあ、何もできやしないよ」

「だけど、誰だって、自分の生活方式が一番いいのよ」

「庖丁は切れる方がいいと思うけどねえ」 (曾野綾子『太郎物語』)

名詞や形容詞（特性を表すもの）が用いられる文が、典型的な時間的限定性のない文であるが（例3, 4）、動詞の場合でも特性について述べている場合などは時間的限定性がなくなる（例5）。上の例での「広い」「男性」「切れる」は主体の質や特性について述べており、これを制御することはできない。このような場合、評価主体にとっての〈理想〉を述べていることになる。

〈理想〉…話者を含む一般の評価主体にとって、当該事態の実現は好都合であり、またある場合には利益もたらされるため、その実現を常に望ましく思う。

時間的限定性がなければ、時間軸上に位置づけられないためにリアリティとの関わりを持たない。よってモーダルな意味・機能にあまり拡がりが出ない。当該事態が「より優れている」「より好都合」「より適している」といったような価値を見出し、評価者が判断している。このように、時間的限定性がない場合は、「ほうがいい」本来の〈価値判断〉の意味が色濃く出る。

時間的限定性あり	時間的限定性なし	
	事態制御可	事態制御不可
	〈行動の適切性〉	〈理想〉

〈表2〉 価値判断の文

4. 2. 時間的限定性のある文

前節では時間的限定性がない文の意味・機能を記述した。本節では、時間的限定性がある文の多岐にわたるモーダルな意味・機能の実現条件を考察していく。

〈時間的限定性のある文〉…時間軸上の特定の時点における個別な事態について述べる文。

時間的限定性がある文の分類には、事態の制御可能性だけでなく、リアリティの観点が重要である。以下、用例数が多いポテンシャル、反リアル、リアルの順に考察を行っていく。

4. 2. 1. ポテンシャルの場合

ポテンシャル²というのは以下のように定義付けられる。

² 高梨(2002)では「未実現」と呼ばれている。「当該事態がまだ実現しておらず、これから実現するかどうか不明の状態」。

〈ポテンシャル〉…時間の中に現実化していないが、条件が揃えば現実化する事態のこと。未来の事態がその典型。

これに則って次の3例を比較してみたい。

(6) 太郎はそう言ってから、

「藤原の兄ちゃん、立ちなおれるかな」

と独り言のように呟いた。

「ひとの家のことを、とやかく言うことはできないけど」

正二郎は言った。

「藤原家は一家を解散した方がいいんだ」

「そうかな」

「歯車が狂って廻り出すと、停らないんだ」

(曾野綾子『太郎物語』)

(7) 「ご苦労様。—あれはどうしたらいいかしら？」

「売る他ないと思います」

「でも、買い手がいる？ 人が殺された部屋なんて」

「黙ってりゃ分かりませんよ」

「そうねえ……」

「でも、急ぐと足元を見られて、買い叩かれる心配があるから、少し待った方がいいと思うわ」

「そうね。一月や二月……」

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(8) 「ちょっと社長室まで来てもらいたい」

「はい。なんでございましょう」

その社員は、不安と期待のまざった表情であとについてきた。星は言った。

「モルヒネ製造の可能性について、その調査をやってもらいたいのだ。早いほうがいい」

(星新一『人民は弱し 官吏は強し』)

(6)では第三者について述べ立てており、「～するべきだ」という〈当為判断〉をしているに留まるが、(7)のように聞き手が行為者の場合には働きかけ性が生じ、この場合には〈勧め〉というモーダルな意味が実現される。また(8)のように間接的に望ましい状況を述べ立てることで語用論的に聞き手にはたらしかける機能もある。

〈当為判断〉…行為者が当該事態を実現するべきであるという必要性を判断すること。

〈勧め〉…当該事態の実現が主に行為者にとって有益であるため、その実現が適していると判断し、その実現に向けて行為者にはたらしかけること。

次に、語用論的な観点を加えて下の例を見たい。

(9) 「おい大変だ、ミズエのお母さんが倒れたぞ！」

「えっ」ハラダミズエが立上った。茶色い大きなハンカチが床に落ち、横から拾い上げる間も

なく、濡れたコンクリートの床に張りついて、黒いしみをつくった。

「いや、そんなにたいしたことはないらしいけれど、でもまあすぐ電話をした方がいい」

ハンドバッグを握りしめて、ハラダミズエは外に出ていった。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)
ここで、「すぐ」という語彙表現によって即時性が明示されているということに注目したい。〈勧め〉
というはたらきかけ性が生じるためには、聞き手が行為者であるという条件以外に、現状に対する即
座の対処があるかどうかに関連しているであろう。以下の2例を比べたい。

(10) a. 「体調がすぐれない時は、病院へ行った(行く)ほうがいい。」

(10) b. 「大変だ、すぐに病院へ行ったほうがいい！」

aの文は〈行動の適切性〉を述べているだけであるが、bは働きかけ性を持っている。これにはコ
ンテキストだけでなく、発話中の「すぐに」といったテンポラリティーに関わる語彙表現が影響し
ている。現場に対する即時的な判断なのか、一般的・普遍的な判断なのかは、時間的限定性の有無と
直結しており、意味・機能の記述には時間的限定性の観点が不可欠であると言える。

また、「ほうがいい」は〈勧め〉だけではなく、〈忠告〉というモーダルの意味・機能も実現する。

(11) ヒロシ 「(ブ然と) ………」

雄太郎 「(察して) ホントは医者になりたくないんじゃないか」

ヒロシ 「(ドキッと) ………」

雄太郎 「だったら、やめてもいいんだぞ」

ヒロシ 「(首を振り) ………来年は頑張るよ」

雄太郎 「これから先何十年も無駄にすることになるぞ。自分の好きなことやった方がいい」

(伴一彦『おヒマなら来てよネ!』)

この場合、単に行為者の利益のみを考慮して〈勧め〉を行っているのではなく、「Aしなかったら
B(不利益な事態)することになる」というように、当該行為を実現しなかった場合の不利益のほう
をより重視して、〈忠告〉(あるいは高梨によると〈警告〉)している。また、「ほうがいい」のよ
うな評価のモダリティー形式は、基本的に話者のほうが聞き手よりも多くの情報を持って事態を
評価・判断している時に用いられる表現であるため、目上の者に対しては使用しにくい。特に
〈忠告〉の意味を実現させるには、同等以下の者に対しての場合である。

〈忠告〉…当該事態を実現しなかった場合、主に行為者にとって不利益をもたらすため、当該事
態の実現に向けてはたらきかけること。

上述したように、「ほうがいい」は2つを比較した上で一方をより高く評価するというのが基本的
な意味であり、言い換えれば、話者のほうが聞き手よりも多くの情報を持って事態をよりよく認識
している時に用いられる表現である。このような、力の上下関係と知識量の差があることを利用して、
〈脅し〉の機能を生じさせることもできる。

(12) 尾上は数メートル離れた場所から芝居じみた仕草で「彼」に指をつきつけ、空しく念を押しした。

「お前は退学だ。覚悟しといた方がいいな」七瀬に指を向けた。(筒井康隆『エディプスの恋人』)

この文は間接的に「覚悟しておけ」と命令しているのと意味的に近いが、命令形との違いは、事態のいきさつについて話し手のほうが情報を多く持っており、それに基づいて聞き手にもたらされる不利益の存在を告知しているという点である。また、最終的な判断は行為者である聞き手に委ねられており、選択の余地が多く残されているという点においても異なる。〈脅し〉の機能は他の評価の複合形式「たらいい」「ばいい」などでは実現することはできず、(Cf. 「?覚悟しといたらいいな」「??覚悟しとけばいいな」)「ほうがいい」の持つ「不利益を考慮する」という意味が影響していると言える。なお、〈脅し〉の機能を働かせる場合には「シテイタ」「シテオイタ」の形を用いることが多い。

〈脅し〉…当該事態を実現しなかった場合、行為者に不利益がもたらされるということを告知する。その不利益は話者によってもたらされることが多い。

ここまで挙げてきたポテンシャルの例はいずれも制御可能な事態についてであったが、制御不可能な事態の場合について簡単に指摘しておく。以下は高梨の記述からの引用であるが、人によって制御できない事態について述べる場合は〈願望〉の意味が実現する。

(13) A 「明日天気になるといいね」

B 「ううん、暑いのは苦手だから、雨が降ったほうがいいよ」(高梨(2002) p.104からの引用)

〈願望〉…まだ実現していない未来の事態の実現を評価主体が待ち望むこと。

このように、特定の時点におけるポテンシャルな個別の事象について述べる場合、〈当為判断〉、〈勧め〉、〈忠告〉、〈脅し〉、〈願望〉といったモーダルな意味・機能が実現する。これらは、評価者のなんらかの意志を述べ立てたり、働きかけたりしている文であり、まとめて〈意志表示〉の文と呼ぶ。

		時間的限定性あり	
		事態制御可	事態制御不可
リアリティ	ポテンシャル	〈当為判断〉 行為者が聞き手→〈勧め〉〈忠告〉 〈脅し〉	〈願望〉
	反リアル		
	リアル		

〈表3〉意志表示の文

4. 2. 2. 反リアルの場合

次に、リアリティーの2つ目の場合分けとして、反リアル³な場合について考察していく。反リア

³ 高梨(2002)では「非実現」とし、「実現しなかったことがわかっている状態」と定義付けている。

ルとは次のように定義される。

〈反リアル〉…条件がなかったために時間の中に現実化しえなかった事態のこと。

まずは次の2例を見て頂きたい。

(14) 「拙者は」

と、長井利隆は重大なことをいった。

「いまでも、鷲山殿が美濃の支配者になったほうがよかったと信じています」

「はあ」

と答えたが、思わず視線をめぐらして長井利隆の顔を見た。

長井は、相変わらず彫りのふかいおだやかな顔に微笑をうかべているだけだ。

(私に、私の才覚で政頼を蹴おとして頼芸を守護職につけてくれ、という意味だろうか)

(司馬遼太郎『国盗り物語』)

(15) 「汐見はどうだい？」と私は看護婦に訊いた。

「大丈夫よ、あの分なら。血圧も大して下らないし。」

(中略) 時々、微かにメスの触れ合う音が洩れた。二台の手術台のうち、成形手術に充てる方の分はすっかり終わったらしかった。何という時間の長さだろう、と私は思った。

「やっぱしやめさせた方がよかったんじゃないんですか、」と不意に良ちゃんが言った。

「何だい、また今頃になって。」

「どうもだんだん心配になって来た。ゆうべ僕ずいぶんよせてすすめたんだが……。」

(福永武彦『草の花』)

(14では、「美濃の支配者にならなかった」というのが事実であるのに対し、それとは逆の「美濃の支配者になった」という現実化しえなかった事態を捉えて評価を与えている。同様に(15では、「やめさせなかった」というのが事実であるのに対し、それとは逆の「やめさせた」という現実化しえなかった事態を捉えて評価を与えている。(14は主体が3人称の人物(「鷲山殿」)で、評価者に当該事態は制御できなかった場合であり、〈不満〉という感情が同時に表出されている。(15は主体が評価者自身を含んでおり、自分自身が意志的に制御できた事態に対する〈後悔〉という感情が表れている。

〈不満〉…制御できなかった事態や、話者である評価主体が行為者でなかった場合に、現実化しえなかった事態に対して残念に思ったり、反感を抱いたりし、仮に当該事態が実現した場合を想定してそれに評価を与えること。

〈後悔〉…制御できた事態で、評価主体が行為者であった場合に、現実化しえなかった事態に対して悔やんだり反省したりし、仮に当該事態が実現した場合を想定してそれに評価を与えること。

これら〈不満〉と〈後悔〉を表す場合は、「よかった」という過去形が用いられる。これは、実現しえなかったことが確定している事態に対して評価を与えているからであろう。

4. 2. 3. レアルの場合

最後に、レアル⁴な事態を表している場合について考察していきたい。レアルな事態を表している用例は非常に限られており、小説の中には見られず、新聞の用例からのみ抽出できた。高梨(2002)や他の先行研究でも、レアルな事態に対して評価を与える「ほうがいい」は取り上げられていなかったが、無視できない数の実例が存在するため、考察対象に含めた。

〈レアル〉…時間の中に現実化している特定の具体的現象のこと。

(16) 小矢部市長が市民に「合併で福岡町にフラれた釈明」をする会合があった。

——福岡町には市長の独断で出血大サービスの提案をしてきた。それでも「高岡市と」とのことだった。小矢部は誠意を尽くしてきたのに、またはっきりしない返事ですから、私も小矢部を守る責任がある……。

「こっちの魅力に気づかない方がどうかしている」という内容だ。さらに「合併できない方がよかったのかも」。市長の言い訳は、まさにイソップ物語の「酸っぱいブドウ」だった。

(朝日新聞朝刊2003.11.13)

上記の例に見られるように、レアルな事態（合併できなかったこと）をとらえて、「やはりそうすることが正しかった」のように自己の判断に対して〈肯定評価〉をしている。しばしば安堵感を出している。すでに実現していることについての評価なので、「よかった」という過去形を用いる。⁵

ここまで見てきたように、特定の時点における反レアル、レアルな事態について述べる場合、〈後悔〉、〈不満〉、〈肯定評価〉といった意味・機能が実現される。これらの意味が実現される時には、評価者の残念な気持ちや安堵感といった内面心理が表に出てくるため、まとめて〈感情表出〉の文と呼ぶ。

		時間的限定性あり	
		事態制御可	事態制御不可
リアリティ	ポテンシャル		
	反レアル	〈後悔〉 〈不満〉	〈不満〉
	レアル	〈肯定評価〉	

〈表4〉感情表出の文

⁴ 高梨(2002)では「既実現」と呼んでおり「現在までに実現したこと」と定義付けている。

⁵ ただし、この用法にはあいまい性があるためか使用頻度は低く、「～てよかった / ～ないでよかった」などの形で表されることのほうが多い。もしくは、「～しないほうがかえってよかった」のように、語彙を挿入することであいまい性を排除する。

4. 3. モーダルな意味・機能のまとめ

ここまで挙げてきた「ほうがいい」の意味・機能をまとめると以下ようになる。

		時間的限定性あり		時間的限定性なし	
レアリティ	ポテンシャル	事態制御可	事態制御不可	事態制御可	事態制御不可
		〈当為判断〉 行為者が聞き手→〈勧め〉 〈忠告〉 〈脅し〉	〈願望〉		
	反リアル	〈後悔〉〈不満〉	〈不満〉		
	リアル	〈肯定評価〉			

〈表5〉「ほうがいい」のモーダルな意味・機能全体像

時間的限定性という条件により大きく2分し、さらに事態制御可能性とレアリティの観点からの分類によって、ももとの肯定評価という意味が〈価値判断〉〈意志表示〉〈感情表出〉という3つのモーダルな側面に展開していることが観察できた。

5. 形式と意味との関連

冒頭で示した「ほうがいい」の8つのパターンでは、a「スルほうがいい」とc「シタほうがいい」が対立、e「スルほうがよかった」とg「シタほうがよかった」が対立、f「シナイほうがよかった」とh「シナカットほうがよかった」がそれぞれテンスで対立している。この形式上の違いと意味の関係について考えてみたい。

5. 1. 「スルほうがいい」と「シタほうがいい」

森山 (1992) や高梨(1999)では、「スルほうがいい」と「シタほうがいい」の間で知的意味に違いはないが、「スルほうがいい」は一般的な事態に用いられ、「シタほうがいい」は個別の事態に用いられる傾向があると指摘されている。前者は時間的限定性がない場合、後者はある場合と言い換えられるだろう。下記の表は『新潮文庫の100冊』のデータをもとに主体の人称の観点から用例数の分布を比較したもの（動詞の肯定の場合のみを抽出）だが、指摘通り、一般主体が文の主体となっている割合が「スルほうがいい」と「シタほうがいい」とで大きく異なっている (14%対4%)。

さらにもう1点注目すべき点は、1人称主体と2人称主体の割合の差が大きいということである。「シタほうがいい」は、2人称主体が1人称主体の4倍近い。つまり、2人称の聞き手に対して働きかける場合には「シタ」形のほうが多く用いられ、1人称、3人称、一般主体について客観的に評価・

判断して述べ立てる場合には「スルほうがいい」が多く用いられる傾向が認められると考える。

	1人称	2人称（1人称を含む場合も）	3人称	一般主体	計
スルほうがいい	14(32%)	20(45%)	4(10%)	6(14%)	44
シタほうがいい	45(19%)	167(72%)	10(4%)	9(4%)	231

〈表6〉「スルほうがいい」と「シタほうがいい」の主体の人称

このことは、「～より」を伴って比較対象を表す従属節が文中に先行して明文化されているかどうかとも関連があると考えられる。「スルほうがいい」に先行する例は6例（14%）、「シタほうがいい」に先行する例は7例（3%）である。「スルほうがいい」のほうが、「ほうがいい」の本来の意味である〈比較〉を前面に出しながら価値判断していると考えられる。

5. 2. 「シナイ」と「シナカッタ」

過去における反リアルな事態に対して〈後悔〉や〈不満〉を表す形式として「シナイほうがよかった」と「シナカッタほうがよかった」があるが、以下の3例を見て頂きたい。

- (17) 「『自民』を前面に出さない方がよかった。有権者には『政党からの押しつけ』と受け止められる時代ようだ」4日投開票の福岡県みやま市長選。自民推薦候補58が大差で敗れた原因を、自民県議の一人はこう分析した。（朝日新聞朝刊2007. 3. 19）
- (18) （仁科注：経企庁長官の橋本内閣の失政に関する発言）私個人の意見を自由に書いた。いま長官の地位についても、それを書いたときの意見が間違っていたとは思っていない。ただ現在の状態として、全体の状況から見て、あの時点で橋本内閣がそれをなされたのは必要だったのかもしれないとは思いますが、その部分だけをとりあげていえば、失政だったと当時も思ったし、いまでも、（増税は）やらなかったほうがよかったと思っている。（朝日新聞朝刊1998. 8. 19）
- (19) 中国人は「文革はなかった方がよかった。もしそうなら現代化がもっと進んだはずだ」というが、果たしてこのケースでクレオパトラの鼻の論理は適用できるのか、と問う。（朝日新聞夕刊1998. 3. 24）

(17)では「『自民』を前面に出す」という行為は、行為主体でもあり評価主体でもある（自民県議）自身によってコントロールできたことである。一方、(18)では「増税をやる」という行為の主体は3人称であり、評価主体（経企庁長官）がコントロールできなかったことである。(19)も同様に、「文革」の存在は評価主体（中国人）によってコントロールできなかったことである。

朝日新聞の1985年以降の記事で調べた結果⁶、(18)(19)のような評価主体者が事態を制御できなかった場

⁶ 小説のデータの中に「シナカッタほうがよかった」の形はあまり見られなかったことから、よりくだけた話し言葉で見られる表現であると思われる。

合に、「シナカット」という過去形の否定形が使われる割合が高くなるという傾向が見られた。これは、過去形のほうが、過去における事態を既に実現済みのものとして捉えるのに適しているからではなからうか⁷。

6. おわりに

本稿では「ほうがいい」のモーダルな意味・機能の体系について、時間的限定性とリアリティ、事態制御可能性を中心軸に据えてその他語用論的要素も加えながら記述していき、〈価値判断〉〈意志表示〉〈感情表出〉という3つの側面に分けて考察してきた。また、形式と意味との関連については、テンス形式との関わりにおいて明らかになったことを指摘した。

今後の課題として、他の評価のモダリティ形式である「たらしい」「ばいい」「といい」などとの相違点を比較することで、それぞれの特徴をさらに明らかにしていきたい。

例文採集資料

- 立原正秋『冬の旅』(CD-ROM版新潮文庫の100冊) 新潮社 1995
 赤川次郎『女社長に乾杯!』(CD-ROM版新潮文庫の100冊) 新潮社 1995
 曾野綾子『太郎物語』(CD-ROM版新潮文庫の100冊) 新潮社 1995
 星新一『人民は弱し 官吏は強し』(CD-ROM版新潮文庫の100冊) 新潮社 1995
 椎名誠『新橋烏森口青春篇』(CD-ROM版新潮文庫の100冊) 新潮社 1995
 伴一彦『おヒマなら来てよネ!』(伴一彦オフィシャルサイト <http://www.plala.or.jp/ban/>)
 筒井康隆『エディプスの恋人』(CD-ROM版新潮文庫の100冊) 新潮社 1995
 司馬遼太郎『国盗り物語』(CD-ROM版新潮文庫の100冊) 新潮社 1995
 福永武彦『草の花』(CD-ROM版新潮文庫の100冊) 新潮社 1995
 聞蔵DNA for Library 朝日新聞社

7 トルコ語で同様の現象が見られるという指摘を Zeynep Gençer 氏から受けた。作例した例文を数名のトルコ語母語話者に比較して頂いたところ、わずかながら下のような違いがあるという結果を得た。a は制御可能性があった。b は過去形マーカーの1つである "miş" が使われている場合で、制御可能性がなかったと判断された。

- a. Bilgisayar bozul-ma-sa iyi ol-ur-du.
 パソコン 壊れる-否定-仮定 いい なる-AOR-過去
 「パソコンが壊れない方がよかった。」(手の施しようがあったが、できなかった)
- b. Bilgisayar bozul-ma-mış ol-sa-ydı iyi ol-ur-du.
 パソコン 壊れる-否定-MİŞ なる-仮定-過去 いい なる-AOR-過去
 「パソコンが壊れなかった方がよかった。」(既に壊れた状態であり、手の施しようがなかった)

参考文献

- 雨宮雄一 (1999) 「現代日本語における義務論理的表現」『日本学報』18
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- グループ・ジャマシ編 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 佐藤里美 (1992) 「依頼文」言語学研究会編『ことばの科学5』むぎ書房
- 高梨信乃 (1999) 「評価的複合表現スルホウガイイについて」『神戸商船大学紀要第一類文化論集』48
- 高梨信乃 (2002) 「評価のモダリティ」宮崎和人他『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 花菫 悟 (1999) 「条件形複合用言形式の認定」『国語学』197
- 森山卓郎 (1992) 「価値判断のムード形式と人称」『日本語教育』77
- 森山卓郎 (1997) 「日本語における事態選択形式」『国語学』188